

まか  
顔十郎罷り通る 上

柴田錬三郎



かおじろうまかとお  
顔十郎罷り通る上

しばたれんざぶろう  
柴田錬三郎

© Eiko Saito 1986



講談社文庫

定価400円

昭和61年1月15日第1刷発行

発行者——野間惟道

発行所——株式会社 講談社

東京都文京区音羽 2-12-21 〒112

電話 東京(03)945-1111(大代表)

Printed in Japan

デザイン——菊地信義

製版——豊国印刷株式会社

印刷——豊国印刷株式会社

製本——株式会社千曲堂

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送りください。  
送料は小社負担にてお取替えます。(庫一)

ISBN4-06-183659-5 (0)



講談社文庫

# 顔十郎罷り通る

上

柴田錬三郎

講談社



## 目次

|        |     |
|--------|-----|
| 行列橋    | 七   |
| 刺客坂    | 三二  |
| 若殿恋い   | 三六  |
| 編笠斬り   | 五一  |
| はだか塩   | 六四  |
| 調所笑左衛門 | 七八  |
| 血汐肌    | 九三  |
| 火の鎖    | 一〇六 |
| 暴徒の街   | 一二  |
| 黄金葬式   | 一三五 |
| 小さな親分  | 一四九 |

|       |     |
|-------|-----|
| 真 珠 壺 | 一六三 |
| 人相指南  | 一七七 |
| 観 音 松 | 一九二 |
| 世すて人  | 二〇五 |
| 天竜心中  | 二一八 |
| 因果仇討  | 二三三 |
| 虚空斬り  | 二四七 |
| 盲目の剣客 | 二六一 |
| 真贋問答  | 二七六 |
| 女心菩提  | 二九〇 |
| 縄かけ地藏 | 三〇四 |
| 虚々実々  | 三三八 |

顔十郎罷まかり通る  
(上)





## 行列橋

—

おそろしく長い顔であつた。顎が、岬のように突出しているので、愈々長く見える。もうひとつの特徴は、その中央に盛りあがつた巨大な鼻であつた。べつだん団子をくつつけたように、大あぐらをかいている不細工なしろものではない。鼻それ自身としては見事な恰好をしているのだが、他の造作と均衡がとれていない巨大さなのである。

造化の神は、おそらく、やりそこなつて、特大の長顔をつくつてしまったので、あわてて、せめてそれにふさわしい高い鼻をくつつけてみたに相違ない。

いずれにしても、一瞥しただけで、生涯忘れられない顔であることは、まちがひなかつた。

背丈もまたひどくひよろ高く思われるが、六尺をこえているほどでもない。素浪人らしく痩せぎすで、肩がとがつて、栄養にめぐまれぬ骨格だからである。

なりもみすばらしい。着流しの黒羽二重は、幾年も前から、着たきりであろう、よこれもひどく、つぎもあたっている。

刀は一本だけ、顔や背丈との調和を考慮したわけではあるまいが、三尺二、三寸あろう、大変長いのを帯びている。

ふところ手で、のそのそと歩く姿は、飄々乎として、浮世ばなれした気色を漂わせる。

京都粟田口から山科へ抜ける坂路をのぼって、日岡峠の休み茶屋へ、ふらりと入った。

茶屋のおやじが、

「あ——旦那様！」

と、目を瞠はなった。

「今朝がた、貴方様を追うて、三騎ばかり、おきむらいが、山科へむかってお行きになりましたぞ」

「うむ」

うなずいただけで、落間おちまの床几に腰かけると、両手をのばして、大きく背のびした。

おやじは、この峠に茶店を出して、もう二十年になるが、こんな変った人間に出会であしたのは、はじめてである。

ちょうど一年前に、西からやって来て、この茶屋に入ると、おやじの顔を眺めて、すぐ、

「お前は、生れてまだ一度も、嘘をついたことがないような顔をして居るな」

と云った。

「さあ、一度や二度は、ついたかもしれないせぬ」

「いや、お前は、天下一の正直者とみた」

「正直の上に、馬鹿がつきます」

「その馬鹿正直を見こんで、ひとつ、たのもうか」

ふところから、縞財布をとり出すと、おやじのてのひらにのせた。

おやじは、その重さに、あやうく、とり落とすところであった。

「こ、これア！」

あっけにとられたおやじに、明るく笑って、

「二百両ある。あずかっておいてくれ」

そう云ったのである。

「見も知らぬてまえに、こんな大金を、おあずけになって、なんの心配もなさいませぬのか？」

「わしは、だから、人相を観る。いまだ嘗て、わしの目は狂ったことがない。たのむ」

まことに、あつさりしたものであった。

去りがけに、姓名をきかれて、

「顔十郎、とてもおぼえておいてくれ。本名はほかにあるが、どこへ行っても、こ<sup>よ</sup>う称んでくれるので、めんどうだから、自分でも、そう名のることにして居る」

と、こたえたことだった。

それから一年間、一度も、姿をあらわさなかったのである。

それが、今朝——陽がさしそめた頃あい、せわしく坂をかけのぼって来た騎馬が三騎あって、ひらいたばかりの店の前で、たづなをひくと、

「おやじ！　ここを、大層顔の長い、鼻の特大の浪人者が通らなんだか？」

と、訊問したのであった。

咄嗟に、

——あ！　あのご浪人！

と直感したが、

「ただいま、店をひらいたばかりでございまして——」

と、かぶりをふり乍ら、さてはいよいよ会えるな、と期待したのである。

一年ぶりで、出現したこの風変りな人物を、つくづくと見まもり乍ら、いつの間にか、ずうつとむかしから懇意の間柄のような気がしているおやじであった。

「茶漬けをくれぬか、おやじ」

顔十郎は、所望してから、寝不足らしいあくびをした。背中に、草がくつついている。野宿したらしい。

おやじは、いそいで、奥に入って、大切にしまっておいた二百両入りの縞財布を持って来ると、

「はい、お返し申しあげます」

と、さし出した。

「預け賃を、十両ばかり、その中から取っておいてくれ」

「十両なんて、とんでもない」

おやじは、かぶりをふった。

「金は欲しくないのか？」

「いえ、欲しくないことはございませぬが……」

「じゃ、取っておくといい」

「左様でございますか。じゃ、頂戴いたします」

おやじは、財布の紐を解いて、片手をさし入れた。

十枚の見当をつけて、つまみ出したとたんに、おやじは、眉をひそめた。

一両小判とばかり思っていたのが、あきれたことに、かたちを似せただけの、ただの鉄板だったのである。

## 二

さすがに、むっとなつて、おやじは、顔十郎を、見た。

顔十郎は、にやりとして、

「成程、お前は、正直な人間だ。預つて一度も、中をのぞいてみようとしなかった証拠だ」

「おからかいになつては、困ります」

「からかったのではない。……むかし、大阪で名うての御用聞きであつたみめぐり、道七も、世をすねて、こんな峠で二十年も、茶屋のおやじをやっていると、いささか老碌ろうろくしているのではないかと疑つて、試してみたのだ」

ちゃんと、こちらの以前の素姓を知っていたのである。

「どういふのでございますか？」

道七は、思わず、むかしの俊敏な岡っ引の顔にかえて、じつと、顔十郎を、瞋ちめた。

顔十郎は、懷中から、油紙に包んだ書類らしい品をとり出すと、

「あらためて、これをお前に預ける。近いうちに——あるいは今日にも、江戸から、これを受け取りに来る者がいる。どんな身なりに化けているか、わしは知らぬ。たぶん、目だたない顔つきをしている、商人風だろう。渡してくれ」

と、手渡した。

「承知いたしました」

道七は、それを奥にしまつて、かわりに、茶漬けをはこんで来た。さらさらと、かき込んだ顔十郎は、張った腹を、ぼんとたたいて、

「これで働ける。腹がへつては、いくさは出来ぬでな」

と、道七に、笑つてみせた。

「失礼でございますが——」

道七は、声をひくくして、訊ねた。

「貴方様は、ご公儀の隠密をつとめておいででございますので？」

「わしは、どこにも飼われては居らぬ。ただの、野良犬だ。ただし、報酬次第では、獵犬もやるし、番犬にもなる。それだけの話だ」

床几から立ち上った顔十郎が、

「では、たのむ」

と云いざま、道七へ、「茶漬け代だ」と、無造作に抛つたのは、これは、まぎれもなく山吹色の一兩小判十枚だった。

「お気をつけなさいまし」

出て行く顔十郎に、道七は、そう云った。

顔十郎は、振り返りもせず、飄々乎として遠ざかって行つた。

道七は、しばらく、てのひらの上の十両の小判を眺めていたが、ふっと、

「……わしも、老いばれた」

ふかい感慨を、その一語にして、洩らした。

顔十郎が、自分を夜明けがた追い抜いて大津まで駆けて、引きかえて来る三騎に、出会したのは、山科をこえて、四の宮にさしかかった折であった。

一町ばかり彼方が曲り角になっていて、そこに騎影があらわれたのをみとめた顔十郎は、さつと臂からげをするや、くるっと踵をまわして、どんどん逃げ出した。

その走りかたは、しかし、一向に敏捷さはなく、むしろ、蠼螂かまきりのように瘦せこけたひよろ長い下肢の動作が、われ乍らもどかしげな、ぶざまな恰好を露呈しているように見受けられた。

げんに、うしろから来ていた数人の旅人たちは、いかにも必死によたよた走る顔十郎を、なかば軽蔑し、なかば気の毒そうに、眺めやったものである。

三騎は、みるみるうちに、土煙りを蹴たてて、追いついた。

顔十郎の瘦身は、そのまま、騎馬の蹄ひづめにかけられて、みにくく地べたに匍はうか、と思われた。ところが――。

次の瞬間、目撃者たちは、驚くべき意外な光景を、そこに見せられて、あつとなることになった。

あわや蹄にかけられるか、とみえた刹那、顔十郎は文字通り蠼螂のように、びよんと、一間を跳んだ。

そして、くるつと、向きなおった身には、三尺の白刃が抜き持たれていて、鼻と顎ばかりの顔を、愉しげにほころばせたとも受けとれそうな表情にして、

「やあつ！」

と、叫びざま、逆に速騎めがけて、突進したのである。

その奔走は、いままでのよたよたぶりとはうってかわって、まさに風のような迅はやさであった。

目撃者たちは、棹立った三騎の前脚が、まるで薪木か何かのように、ぼんぼんぼん、と宙へ、飛ばされるのを、見た。



三騎の間隔は、それぞれ、二間あまりあったのだが、二番騎も、三番騎も前騎の脚が面断されるのをみとめ乍ら、どうにもふせぐいとまがなく、わずかに、しんがり、馬上で、のけぞるようにして、抜刀したにすぎず、抜いた瞬間には、もう馬脚を斬られていた。

横転する馬から、三士が跳びはねて、路上に立った時、ふたたび、「やあっ！」という懸声がかかって、顔十郎が、駆けもどって来た。

「おのれ！」

「くそっ！」

「うぬっ！」

三士は、それぞれ、目を剥き、齒を剥き、短い、鋭い、本能そのものの叫びを発して、白刃をふりかぶって、顔十郎を迎撃しようとしたが……。

そこでもまた、目撃者たちを、啞然とさせる現象が起った。

すなわち、顔十郎めがけて、斬りつけた者たちの腕が、一本ずつ、正確に、肱のところから、大根のように、すばっ、すばっと面断されて、撥ね上ったことである。

もとの地点に駆けもどった顔十郎は、長い白刃を、腰に納めると、呼吸も乱さず、のそのそとした足どりにかえって、片端にして、地べたに倒した敵がたへ、いちいち、鄭重に頭を下げて、

「ご無礼——ごめん！」

とことわっておいて、通りぬけて行ったのである。